庭園の構想に関する研究No. 21

光悦の信仰と本法寺庭園の構想について

A Study on the Japanese Gardens Viewed from the Teaching No. 21
Case Study on the Gardening Conception of the Honpō - ji and the
Faith of Hon - ami - Kōetsu

澤 田 天 瑞

Tenzui Sawada

澤田庭園研究所

Key Words

1. 本法寺庭園

2. 庭園の構想

3. 本阿弥光悦

The Honpō - ji Garden Viewed from the Teachings Hon - ami - Kōetsu

1. 研究の目的

本研究の目的は、京都市上京区堀川通り寺ノ内地内に
ある、日蓮宗本法寺庭園の作庭構想を、「法華経」と日蓮
聖人の著書「唱法華題目抄」「御義口伝」などのほか、本
阿弥光悦の信仰に基づいて、思想的に解明しようとする
ものである。

2. 寺の沿革と庭園の概要

叡昌山本法寺は、日蓮宗身延一致派の本山。創建は永
享8年（1436）、開祖は日親上人。はじめ四条高倉（一説
には四条綾小路）に建立されたが、一条堀川に移転、さ
らに天正16年（1588）、豊臣秀吉の聚落第造営のため、
現在地に移転させられた。

本法寺と本阿弥家との関係は、光悦の曾祖父本光が開
祖日親上人に帰依したことがはじまり。光悦の父光二が、
慶長4年（1599）、本法寺諸堂建立の際に施主となり、光
悦は「本法寺」の扁額を揮毫し、庭園を築造した。

庭園は書院の東庭で、俗に「巴の庭」と称し、「都林泉
名勝図会」には「林泉は光悦の作にして、世に三巴の庭
と称す。その形、築山泉石共に浪の紋を模す。」¹⁾（京都名
園記上巻P188）

庭園は築山枯山水の書院式。面積は約150坪（380平
方米）。庭園の敷地は南北に長く、南部は丁字形となり、
東西に張出している。北部の東側は南面する土蔵の側面、

南西部は曲折する渡廊下によって囲まれている。

巴形の築山は三個所に配置されて、いずれも低い。北
の築山は土蔵の西側で書院の正面。東の築山は大きく、築
山の巴の頭と尾を結ぶように石橋を架け、その奥に枯滝
を組む。西の築山は渡廊下の際にある。三個所の築山は
いずれも巴形で渦を画き、巴は「右巴」である。

枯滝組みは二個の滝添え石の中央に鏡石を組む。鏡石
は縦に白筋がある青石。鏡石を傾斜させて、奔流する水
勢を表現している。

北と西の築山を結ぶ線のほぼ中央、書院東南の雨落溝
先東側に、切石の長物十本で囲んだ八角の蓮池がある。十
本の切石の角は三本を除き、他はすべて合わせ目をはず
して、蓮華の蕾を表現するように構成されている。

また、蓮池の北に、半円二個を合わせた円形の平石
を据えている。

3. 庭園の要旨

本庭園は、本阿弥光悦が、慶長4年（1599）本法寺諸
堂建立の時、書院の東庭として築造した築山枯山水の書
院式庭園で、庭園の主題は「妙法」、構想は「釈迦牟尼仏」、
構成は「法華経」として築造した、日蓮宗の法華庭園で
あると考察する。

4. 庭園の主題

本庭園の主題とした「妙法」は、「妙法蓮華經序品第二」に「所謂諸法、如是相。如是性。如是体。如是力。如是作。如是因。如是縁。如是果。如是報。如是本末究竟等。」²(大正新修大蔵經第九卷)

(所謂諸法の如是相。如是性。如是体。如是力。如是作。如是因。如是縁。如是果。如是報。如是本末究竟等なり。)

(大意) 諸々の事物、乃至諸法は、それぞれ独立、固定したものではなく、無我と空が相依りあい、関係しあって生成、変化(無常、縁起)している。諸物、諸法が十如是のもと、あい関係しあっているところに、法華經は宇宙統一的真理を見た。その統一的真理を一乗妙法と呼んだ。³(田村芳朗 法華經P74)

5. 庭園の構想

「釈迦牟尼仏」は、西暦紀元前九百年ごろ、中印度、憍薩国(Kośara)、迦比羅衛城(Kapila - Vastu)の淨飯王(Suddodana 首圖駄那)の太子、悉達多(Siddhartha)として生まれ、幼い頃から婆羅門の学者、跋陀羅尼(Bhadrani)、或は朴奢密多羅(Viśvamitra)について、五明(声明、巧明、医方明、因明、内明)、四吠陀(梨俱吠陀 Rig - Veda、娑摩吠陀 Sama - Veda、耶柔吠陀 Yajur - Veda、阿蘭婆吠陀 Atharva - Veda)などの婆羅門の学問を修め、さらに孃提提婆(忍天 Ksanti - dēva)について武芸を励み、文武両道に達した。太子の天才は、思想的にますます輝きを加えたが、太子は世間的な快樂を嫌い、出家することによって、思想上の満足を得ようと望んで止まなかった。

ある時、太子が城門を出て四方を見て廻った時、腰の曲った白髪の老人がよろめき歩き、病人が息も絶えだえに、瘦せ衰えた身を路に臥し、或は死人の屍を蓮台に置いて、親族や看族が大声をあげて泣きながらこれを送るのを見て、世相の無常と感じ、人生に於ける老、病、死の苦痛を免れる方法を悟りたいと考えている時、一人の沙門の姿も心も清浄でいる有様を見て、決然として出家の志を起こし、深遠の道を探究しようと思った。

幸いにも、太子は妃、耶輸陀羅(Yasôdhara)との間に一子、羅喉羅(Râhula)が生れたので、出家の時が来たと思って、十二月八日の夜半、妻妃、女官などが熟睡している間に、御者の車匿(Channa)を連れて王宮を出

で、東方の藍摩国(Râma)の方へ行った。藍摩国から東、阿伏弥(Avami)湖畔の森林で、自ら髪を剃り落とし、糞糞衣を着た。

それから恒川の流域を南行し、多くの婆羅門を歴訪し、二仙人について数論派の学理を学んだが、この派の学問が真の解脱の道でないことを知り、自ら苦行して解脱の道を求めた。

苦行は十二年に亘ったが、この苦行もまた真の解脱の法ではないと知った釈尊は、苦行を捨てて西方の婆羅奈斯国(Vārānasi)の鹿野苑(Mrgadāva)へ行った。

釈尊は、東北に進み、前正覺山(鉢羅笈菩提山 Prāgbodhi)の石窟に入ったが、端座することができず、再び河を渡って西方に行き、伽耶城(Gaya)、すなわち今の仏陀伽耶(Buddha - Gaya)の菩提樹(Bodhidruma)、すなわち畢波羅樹(Pippala)の下、金剛宝座に、吉祥(Svastika)の奉る淨軟草を敷いて安座した。ここで沈思黙想、よく魔と戦うこと四十九日、結局はこれを降して、生、老、病、死の根本を滅し、貧、瞋、癡が起ることもなく、真に解脱して生死を超越することができた。

十二月八日の早暁、朗然と覺つて、ついに仏陀(Buddha)となり、釈迦牟尼如来となったのである。年まさに三十才、王城を出てから十二年を要した。⁴(妙法蓮華經P1~4)

6. 庭園の構成

妙法蓮華經は、釈尊が七十二才から八十才に至る八年間、中印度摩訶陀国の主都、王舍城の東北に聳える耆闍崛山(靈鷲山)で説かれたもの。⁴(妙法蓮華經P16)

妙法蓮經の教えは最上の勝れたもの。しかし、それを直接言葉で表現することが困難なため、美の極致ともいふべき蓮華、仲でも最も秀でた白蓮に託して、その至上性を標榜した。

蓮華が泥水から出穂して、清浄無垢な華を咲かせるように、最勝の法(仏乗)は、小乗の泥水から出離している。同時に、声聞(小乗の僧)も、法華經を摺むことにより、泥水から出離(成仏)することができる。また、蓮華が華と実を同時に備えているように、信ずることが困難な者達に、法華經は仏の実態(法身)を開示して、信心を起さしめる。

法華經には、歴却修行による万人成仏(因)と久遠の

仏（華、仏寿の永遠）が説かれている。これを蓮華の花（因）と実（果）の同時存在に準え、この因と果を併存して備える法華經の勝れた説き方を妙法と名づけた。

法華經は、迹門（法華經二十八品のうち前半の十四品に対する呼称）と本門（後半の十四品・教主釈尊が久遠の仏であることを表明する。）に区別される。これは、本来法身である仏（無始無終、常住して滅することがない存在）が、衆生救済のため応身の仏（印度で生れた釈尊）として、この世に出現して法を説いたことからなる区別で、迹門は応身仏としての釈尊の教節であり、本門では、応身仏の本体である久遠の本仏が説き明かされている。従って、迹門を開いて本門を顕わし、本門に於いて迹門が生かされるという関係にある。この関係を蓮華の花と実との同時存在に寄せた経名が如実に物語っている。⁵（仏教經典の世界 P72～73）

7. 考 察

主題とした「妙法」は、法華經のサンスクリット語（梵語）の原典名、サツダルマ、ブンダリカ、スートラ（Saddharma – Pundarika – Sūtram 薩達磨芬陀利迦經）という。この語を直訳すると、「なによりも正しい白蓮のような教え」という意味になる。中国では、西晋の竺法護が、この原意に添って「正法華經」と訳し、姚秦の鳩摩羅什は、正しいを「妙」と意識し「妙法蓮華經」と訳した。⁵（仏教經典の世界 P72）

「妙法」は「妙法蓮華經方便品第二」ではつぎの如く説く。

「如是妙法。諸仏如来。時乃説之。如優曇鉢華。時一現耳。舍利弗。汝等当信。仏之所説。言不虛妄。舍利弗。諸仏随宣説法。竟趣難解。所以者何。我以無教方便。種種因縁。譬喩言辭。演説諸法。是法非思量分別。之所能解。唯有諸仏。乃能知之。所以者何。諸仏世尊。唯以一大事因縁故。出現於世。舍利弗。云何名諸仏世尊。唯以一大事因縁故。出現於世。諸仏世尊。欲令衆生。開仏知見。使得清淨故。出現於世。欲示衆生。仏知見故。出現於世。欲令衆生。悟仏知見故。出現於世。欲令衆生。入仏知見道故。出現於世。舍利弗。是為諸仏。唯以一大事因縁故。出現於世。²（大正新修大藏經第九卷）

（是の如き妙法は、諸仏如来、時に乃し之を説きたもう。優曇鉢華の時に一たび現するが如きのみ。舍利弗、汝等

当に信ずべし。仏の所説は言虚妄ならず。舍利弗、諸仏の随宣の説法は意趣解し難し。所以は何ん。我、無数の方便、種種の因縁、譬喩の言辭を以て諸法を演説す。是の法は思量分別の能く解する所に非ず。唯諸仏のみ有して。乃し能く之を知しめせり。所以は何ん。諸仏世尊は、唯一大事因縁を以ての故に、世に出現したもう。舍利弗、云何なるをか諸仏世尊は、唯一大事の因縁を以ての故に、世に出現したもうと名づくる。諸仏世尊は、衆生をして仏知見を開かしめ、清淨なるを得せしめんと欲するが故に世に出現したもう。衆生に仏知見を示さんと欲するが故に、世に出現したもう。衆生をして、仏知見の道に入らしめんと欲するが故に、世に出現したもう。舍利弗、是を諸仏は唯一大事の因縁を以ての故に、世に出現したもうと為づく。）

（大 意）

優曇鉢華の花は、三千年に一度咲くというが、これから説く教えは、めったに聞かれる教えではない。どの仏でも、いまこそ説くべきだと考えられたときでない、教えを説くものではない。舍利弗よ、仏の教えには嘘や偽はないから、心してしっかり聞くべきである。

仏というものは、因縁を説いたり、譬喩話をしたり、理論をもって説いたり、いろいろな説き方をするので、その目的がどこにあるのか的確につかみ難いかも知れないが、実は唯一の大事を説くために、この世に現われたものである。

その一大事とは、「人間はなんの為に生きるのかを、本当に弁える」ということである。これがとりもなおさず仏の知恵である。この事を弁えれば、人間一人一人がみんな仏になれるし、本当の幸せを得ることができる。

それには、まず自分に仏性があるということを悟らなければならない。自分にも仏と同じ性質があると判れば、小さな自己本位の考えが自づから洗い去られ、心が清くなる。仏は、このような仏の知恵、即ち仏知見を開かせるために、この世に現われた。仏知見に気がついた者に、今度は仏の眼、仏の知恵で見ると、世の中はかくの如しということを示めされる。即ち仏知見を示めしてくださる。

世の中の真実の有様が判ると、仏の知恵でこの世界が安隱な境地になるということが悟れるようになる。即ち仏知見を悟らせてくださる。

しかし、この境地には自然に到着できるものではない。懸命に修行し、精進してこそ、はじめて入ることのできる境地である。仏は一切衆生を導いて、この仏知見の道を入らせてくださる。仏知見は「開かせ」「示めし」「悟らせ」「入らせる」という、懇切丁寧な順序で、「人間は何のために生きるかを、本当に自覚する」という仏の知恵を、すべての人間が持つことができるように導きたい。この一大事のために仏はこの世に現れた。⁶（法華經の新しい解釈 P104～105）

日蓮聖人は著書「御義口伝」は「仏知を妙と云ふ也、仏見を法と云ふ也、此の知見の体を修行するを蓮華と云ふ也。因果の言語は經なり。」と²⁰（P7）

日蓮聖人は題目の功德について、「唱法華題目鈔」につぎの如く述べている。

「釈迦如来、法華經をとかとおぼしめして、世に出でまししかども、四十余年の程は法華經の御名を秘しおぼしめして、八十三年のころより七十余に至まで、法華經の方便をまうけ、七十二にして始めて題目を呼び出させ給へば、諸經の題目にこれを比ぶべからず。その上、法華經の肝心たる方便、寿量の一念三千、久遠実成の法門は妙法の二字におさまれり。下略。」⁶（日蓮 P39）

本庭園の主題「妙法」は「妙法蓮華經序品第二」の「如是本末究竟等なり」（法華經の宇宙統一的真理を一乗妙法という）と、「唱法華題目鈔」の「久遠実成の法門は妙法の二字におさまれり」に基づく。

蓮池の北にある半円を二個組み合わせた円形の平石は「妙」を表現している。

「法華題目鈔」に「妙とは天竺には薩といひ、漢土には妙といふ。妙とは眞の義なり。眞とは円満の義なり。法華經の一字の文字。一字一字に余の六万九千三百八十四字を納めたり。譬ば大海の一滴の水に一切の河の水を納め、一つの如意宝珠の、芥子ばかりなるが、一切の如意宝珠の財を雨らすがごとし。」⁶（日蓮、原典日本仏教の思想 9 P117）

また、「御義口伝」に「故に妙法蓮華經と題して次に方便品と云へり。妙樂の記の三の釈に、本疏の即是真秘の即を以円為即と消釈せり、即は円なれば法華經の別名なり。即とは凡夫即極諸法実相の仏也。円とは一念三千なり。即と円と言は替れども妙の別名也。」（P11～12）

（大意）

故に秘をもって方を釈し、妙をもって便を釈することが、この方便品の意図である。この秘妙という意味で方便品という。これをうけて妙樂大師の法華文句記の第三には、つぎのようにいっている。

法華文句では、方便を第一に法用、第二に能通、第三に秘妙に約して釈し、第三の秘妙に約して釈するのがこの經の本意であるといっているが、それでは、第三に秘妙と約して釈すとは、どのような意味であろうか、とくに即是真秘の即とは、妙なるが故に即なのである。円をもって即となし、三権すなわち三乗（または藏通別の三教等）は不即である。すなわち、法華經においては、宇宙の本源たる妙法蓮華經を説き明かしたので完全無欠であり、円であり、即である。⁷（御義口伝講義上 P179）

「法華題目鈔」に「妙の一字に就いていへば、法華經第四に、權經方便の門を開いて法華真実の相を示めす、とあり、章安大師がこれを釋して、四十余年秘密にして置た仏内証の奥蔵を発たから妙といふ、とあり。妙樂大師はこれを受けて、髡の字は開く義である。といはれた。されば、妙は開くといふことである。中略。大地の上に人畜草木があるけれども、日月の光がなければ、眼はあっても、色も形も判らないやうなものである。四十余年の諸經は長夜の闇であり、法華經の本門と迹門とは日月の光である。」⁶（日蓮 P265）

蓮池の北にある半円二個を組合せた円形の平石は、「法華題目鈔」の「円は妙の別名也」から「妙」を表わしている。

また、半円二個の組合せは、「法華經の本門と迹門とは、日月の光である。」ところから「本門と迹門」を、さらに「日月」を表現して組まれている。

築山の三巴は本庭園の構想「釈迦牟尼仏」を表現している。三巴とは古代中国の蜀の地名。譙周の三巴記につぎの如く記されている。

「閬苑白水東南流、曲折三廻如巴字、故名三巴」⁸（大辞典 P361 平凡社）

（閬苑の白水東南に流る。曲折すること三廻、巴字の如し。故に三巴と名づく。）

三廻とは¹⁰「難姓、難地名事典」に「神奈川県秦野市に釈迦堂があり、釈迦牟尼仏が祀られている。その周りを三廻めぐるのが信者の信仰のしるし。さらにこれをわが

国の人は三廻部（みくるべ）といて、釈迦牟尼仏の字を当てて苗字にもある。」(P233)

慶長二年版「節用集」には「釈迦牟尼仏」と記載がある、「ミクルベ」の送り仮名をつけている。¹¹(古本節用集 P200)

本庭園の構成である「法華経」は、蓮池の縁石十本の切石で、天台智顗大師の著書「法華玄義十卷」を表現して組み「法華経」を意味している。

日蓮聖人は「唱法華題目鈔」でつぎの如く述べている。「天台大師、玄義十巻を造り結ふ。第一の巻には略して妙法蓮華経の五字の意を宣結ふ。第二に巻より七の巻に至るまでは、また広く妙の一字を宣べ、八の巻より九の巻に至るまでは法蓮華の三字を釈し、第十の巻には経の一字を宣結へり。」¹²(日蓮 P39)

法華玄義の天台大師と法華文句記の妙楽大師については、光悦の晩年の文書に明記され、「法華題目抄」も光悦によって書写されている。(本法寺蔵)

光悦の信仰

光悦の処生観の重要な基調の一つとして、彼の信仰生活がある。本阿弥家は元祖妙本が松葉谷の日静上人を帰依して以来、本光と日親との関係もあり、代々日蓮宗の篤信仰であった。光悦の日蓮宗に対する帰依は、かくの如き関係から出るものである。

「行状記第50段」にも「殊更日蓮宗に信心あつく候故」といはれているように、特別の信仰を持っていたようである。彼がとくに日蓮宗のどの碩徳に親炙したという、特別の記録はないが、本法寺、妙蓮寺、久遠寺、法華経寺など、日蓮宗の寺院に多くの筆蹟を遺していることからみて、その信心は並々ならぬものがあつたことが判る。

¹²(本阿弥行状記と光悦 P242)

光悦の書写

光悦が法華経典を書写したものに

観心本尊得意抄	1巻	京都	本法寺蔵
法華題目抄	1巻	京都	本法寺蔵
如説修行抄	1巻	京都	本法寺蔵
立正安国論	1巻	京都	妙蓮寺蔵
始聞仏乗儀	1巻	京都	妙蓮寺蔵
始聞仏乗儀	1巻	京都	本満寺蔵

光悦が日蓮宗寺院に揮毫した扁額は

「本法寺」	京都	本法寺蔵
「立本寺」	京都	立本寺蔵
「学 堂」	京都	常照寺蔵
「通 本」	山梨	久遠寺蔵
「本遠寺」	山梨	本遠寺蔵
「正中寺」	千葉	法華経寺蔵
「祖師堂」	千葉	法華経寺蔵
「妙法華経寺」	千葉	法華経寺蔵

光悦は京都洛北の鷹峰の地を賜はるや、一族縁者の屋敷を配し、中央に位牌所（後の光悦寺）を設け、一族の手によって常照寺、妙秀寺、知足庵などの日蓮宗の各寺院が営まれた。

光悦は自らの死期の迫るのを知って、晩年の日付を有する文書が光悦寺に蔵せられている。

南無妙法蓮華経

南無釈迦如来

南無本化四菩薩

南無天台大師 註1

南無妙楽大師 註2

南無伝経大師

南無日蓮大師

南無六老僧

南無日本国中上人

南無代々上人

南無本法寺開山上人

南無代々上人

天下一同仏法流布

臨命終正念

即身成仏

太虚庵

寛永四年正月朔月

光悦 花押

敬白

実相常住如天

甘露今釈妙法

能通実相

¹²(本阿弥行状記と光悦 P249～251)

註1 天台大師 (538～597)

僧名は智顗、智者大師とも称し、中国天台宗の開祖、法華三大部の講説をはじめ、多数の論述を行ない、日本の仏教大師や日蓮上人にも大きな影響を与えた。「中国の釈迦」とも称されており、法華玄義の著者である。⁶⁾(日蓮、唱法華題目鈔 P365)

註2 妙楽大師 (711～774)

中国天台宗第六祖湛然、法華文句疏記、摩訶止観輔行伝弘決、法華玄義釈籤といった、いわゆる天台三大部の注釈書をはじめ、天台智顗の著述の多くに注釈を加え、天台教学の正義を伝え広めた。⁶⁾(日蓮、四条金吾殿女房御返事語註 P310)

8. 結語

本法寺庭園は、本阿弥光悦が、慶長4年(1599)ごろ、本法寺諸堂建立の時、書院の東庭として築造した、枯山水の書院式庭園。庭園の主題は「妙法」、構想は「釈迦牟尼仏」、構成は「妙法蓮華経」として築造された。日蓮宗の法華庭園であると考察する。

Summary

The object of this study is to expound the gardening conception of the Honpō-ji, the Nichiren sect temple, in the area of Terano-uchi along the Horino-uchi, Kamikyō-ku, Kyōto-shi, based upon the Lotus Sūtra or the Shō-hokke-daimokushō and Ongikuden by Saint Nichiren or the faith of Hon-ami-Kōetsu.

A conclusion

The Honpō-ji garden was built by Hon-nmi-kōetsu about the fourth year of Keichō (1599 A.D.) as the eastern garden of a drawing room along with other temples.

I think this Hokke karesansui garden like a drawing room was built, regarding the subject as “the supreme law,” the conception as “the Buddha Sakyamuni,” and the formation as “the Lotus Sūtra.”

《参考文献》

1. 久 恒 秀 治
京都名園記上巻
1967年 誠文堂新光社
2. 大正新修大蔵経刊行会、大正新修大蔵経巻九
昭和44年 大正新修大蔵経刊行会
3. 田 村 芳 朗
法華経
昭和44年 中央公論社
4. 細 井 日 達
妙法蓮華経
昭和43年 創価学会
5. 長 谷 川 秀 記
仏教経典の世界総解説
1990年 自由国民社
6. 戸 頃 重 基
日蓮、原典、日本仏教の思想9
1991年 岩波書店
7. 池 田 大 作
御義口伝講義上
昭和42年 創価学会
8. 庭 野 日 敬
法華経の新しい解脱
平成3年 佼西出版社
9. 下 中 邦 彦
大辞典
1985年 平凡社
10. 丹 羽 基 二
難姓、難地名事典
1994年 新人物往来社

11. 中 田 祝 夫
古本節用集文種研究並びに総合索引
昭和43年 風間書房
12. 正 木 篤 三
本阿弥行状記と光悦
平成5年 中央公論美術出版
13. 紀 野 一 義
法華經を読む
昭和57年 講談社現代新書
14. 渡 辺 宝 陽 他
日蓮宗
昭和59年 大法輪閣
15. 金 岡 秀 友
仏教宗派辞典
昭和49年 東京堂出版
16. 重 森 三 玲 他
日本庭園史大系九卷
昭和51年 社会思想社
17. 平 川 彰 他
講座、大乘仏教4
法華思想春秋社
18. B.H 日本語研究ぐるうぶ
易林本小山板節用集
1971年 文化書房博文社
19. 諸 橋 徹 次
大漢和辞典
昭和46年 大修館書店
20. 飯 田 恵 済
御義口伝
昭和14年 帝釈堂
21. 辻 善 之 助
日本仏教之研究
昭和17年 金港堂書籍株式会社

図No. - 1 本法寺庭園平面図 (日本庭園史体系より)

図No.-2 神奈川県秦野市三廻部町

水滄砂滄才釧才三目釧三
 看上板味噌漉三尋木建水
 輻車輪之中有之御弓万空馬
 數有三十也
 名釋辺牟尼佛坂東三浦三宅一
 言冥顯感道驗名聞帳全
 聞不見微塵細妙明神證御
 落居
 正躰合交見繕懲苦直付

図No.-3 敬弔年版節用集より

写真No. 1 本法寺庭園の蓮池と円石

写真No. 2 本法寺庭園滝口と石橋